

2020. 6. 21 (日) マタイ21:1~7

21:1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。

21:2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつながれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。

21:3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」

21:4 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。

21:5 「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」

21:6 そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、

21:7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。

#### <説教>

マタイの福音書21章は、「さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき」(21:1)、と始まります。

「そのとき」は、主イエスが復活なさる一週間前の日曜日のことでした。

そしてこの週は過越の祭りが行われる週でした。

その週の金曜日にイエスは弟子たちに予告なさったとおりに十字架につけられました。

そして葬られて三日目の日曜日の朝、やはり弟子たちに予め言われていたとおりにイエスは死者の中からよみがえられました。

そのようにしてイエスは「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与える」(20:28)、本当の過越の子羊としてエルサレムにお入りになりました。

そのときの様子がまず記されています。

21:1 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。

21:2 「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつながれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。

21:3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」

21:4 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。

21:5 「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」

21:6 そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、

21:7 ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた。

イエスは本当の過越の子羊としてエルサレムにお入りになりましたが、同時に、5 節に言われているように、神の民（ユダヤ人）の王としてもエルサレムにお入りになりました。

しかしそのときの王イエスの姿は、世の普通の王とは違っていました。

それは「**柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。**」というところがありました。

しかもイエスのご自分が王としてお乗りになる乗り物（「ろばの子」「子ろば」）を他人から借りなくてはなりません（「すぐにお戻しになります」という欄外注の訳を採るなら、後でお返しになったことになります）。

イエスは自分が乗るためのろば一頭さえ持っておられませんでした。

そのようにイエスは貧しくられました。

とはいえ、イエスは確かに王であられました。

ご自分がお召しになった二人の弟子になすべきことをお命じなり、彼らをお遣わしになりました。

そして「**子ろば**」と「**ろば**」をもご自分のためにお召しになりました。

「**主がお入り用なのです**」の「**主**」を正確に訳せば「**彼ら（彼女ら、それら）の主**」です。

「**彼ら（彼女ら、それら）**」とは、その飼い主である「**だれか**」とも言えるし、同時に「**ろば**」と「**子ろば**」のことだとも言えるのです。

確かに「**ろば**」と「**子ろば**」の本当の持ち主・支配者、王なるお方は、それらをお造りになったお方、神であるお方（イエス）でした。

「万物は御子によって造られ、御子のために造られ」（コロサイ 1:16b）たのです。

そしてイエスは、そのろばの飼い主の心をも支配している王であり、弟子たち（人間）がまだ見ていないこと知らないことをも予め計画しておられ、知っておられ、実現なさるお方でした。

そういう偉大な絶対な力ある神、支配者、王であられるお方がいよいよ公に神の民ユダヤ人たちの前に王としてご自分をお現しになろうとしていたのです。

がしかし、そんな王イエスがお乗りになったのは、背が高く強く勇しい軍馬ではなく、見るからに弱く背も低い「**ろばの子**」「**子ろば**」でした。

そのことはどんなことを表しているのでしょうか。

「**このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった**」のですが、その「**預言者**」とは、一人はゼカリヤです。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」（ゼカリヤ 9:9）とあります。

「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。」の部分はイザヤ書 62:11 によって「**娘シオンに言え。**」とマタイは言い換えたようです。

そして、ゼカリヤ書にはある「**義なる者で、勝利を得**」の部分はわざわざ省略して引用しています。

それで、マタイが特に強調したかったイエスの王としての姿は、「**柔和な方で、ろばに乗って**」ということだったとわかります。

「ろば」は王が乗るには全く似つかわしくない、貧相で弱い動物でした（「子ろば」ならますますそうなります）。

そして、「柔和な」と訳された言葉（ギリシア語）は、本来のヘブル語ではもろに「貧しい、困窮している、弱い、苦しむ、悩む、低い」という意味の言葉なのです。

ゼカリヤ 9:9 で「柔和」と（日本語）訳されているのは旧約聖書の中ではむしろ例外的です（欄外注の「へりくだった」のほうがまだ本意に近いでしょう）。

ですから、ここでマタイが強調しているイエスの王としてのお姿は、単に「態度がやさしくおとなしい」という意味で「柔和」だということではありませんでした。

「貧しく、弱く、低く、悩み、苦しむ」王という、実に不思議な、「柔和」な王イエスの姿を、このゼカリヤ書からの引用によってマタイは記したのです。

そして、そんな王イエスを「見よ」、そのお方が「あなたのところに来」た「あなたの王」だ、と言うのです。

「荷ろばの子である、子ろば」ならやはり荷物を運ぶためのろばだったでしょう。

そんな「荷ろば」に乗るということは人間扱いでなく荷物扱いでよいとイエスご自身がされたということでもありましょう。

人が乗るための、ましてや王が乗るための豪華で見栄えの良い鞍（くら）など備えられてはいませんでした。

それで弟子たちは「自分たちの上着をその上に掛け」ました。

何の文句も言わないで「そこでイエスはその上に座られ」ました。

そのように、王イエスの姿は、この世の王のように軍馬や駿馬（優れて良く、速く走る馬）にまたがり、大軍を従えて、上から人々を見下ろし威圧するような姿ではありませんでした。

そうではなく、全く反対に鈍（のろ）く小さく弱く背も低くみすぼらしい「子ろば」に乗った、「貧しく、弱く、低く、悩み、苦しむ」王の姿でした。

多くのユダヤ人がパリサイ人や律法学者たち、祭司長たちの教えに惑わされ、またローマの支配下で貧しく、弱く、低く、悩み、苦しんでいました。

そして何よりも自分たち自身の罪、不信仰によってお互いに、貧しく、弱く、低く、悩み、苦しんでいました。

イエスはそういう貧しく、弱く、低く、悩み、苦しんでいる多くの人々と同じようになってくださったのです。

そのような罪人たちの罪を、そして貧しさ、弱さ、低さ、悩み、苦しみをご自身の身に引き受け、負われたことがイエスの「柔和」さの現れでした。

この後、祭司長たちや律法学者たちに引き渡され、死刑に定められ、ローマ人に引き渡され、嘲られ、むちで打たれ、十字架につけられて殺されることがイエスの「柔和」の現れでした。

そういう「柔和」なお方イエスこそが、預言者が語っていたとおりに「あなたのところに来」た「あなたの王」だ、とマタイは言っているのです。

「貧しく弱く悩み苦しんでいるあなたがた神の民よ。あなたの王イエスがあなたのところに来ておられます。見なさい、その王なるお方は、あなた方の罪をその身に負われ、貧しく弱く悩み苦しむあなた方と同じ姿であなた方の所に来てくださいました。小さく弱く

みすぼらしい子ろばに乗られたのはそのしるしなのです。」

「だからこの王イエスにあなたがたも近づくことができます。いや近づかなければなりません。安心してこの王の支配下に入れていただき、この王に一切を信頼してお任せなさい。」

そのようにマタイは神の民に伝えたのです。

そして神は今日も私たちに同じように語りかけ、招いておられるのです。